

つた^エからエに移つたので、古くは冽の名で今の平壤河を呼んでいたのであらう。

次に樂浪の名稱を考へる、

樂浪も冽も先秦時代、大同江を中心にしてゐた朝鮮國の地名水名である、冽も樂浪も今日は羅行音であるが、思ふに古代の韓民族も名詞の初にラ行音はもたなかつたこと今日の如くであつたであらう。之を冽といつたのは、恐らく朝鮮人が何^エと^エといふのを、上を略して支那人が冽としたのでないか否樂浪と同様で樂字の羅行音を奈行音に改めて、ナラ(國の意)といひ列ば之を羅行音にして^エと^エと^エとして用ひたのであらう、もしこの假想が適中すれば所謂箕子の朝鮮人は支那文字を使用して、既に自國音で發育し、之を假字としてエ又はナラといふ地名を表示したのであるまいか。

以上は抄録である、しかしこの中に我國語の府をコーとよむことや、大阪の西生郡東成郡といふこと、又は奈良ナラといふ語の古い時代の地名考が潜在してゐると考へてこゝに之を摘要したのである。(F)

新著紹介

○地質鑛物學綱要

田上政敏著 中興館發行四月 菊版
三三一頁+二四頁 定價三圓五〇錢

近來高等學校教科程度の鑛物學書及地質學書の出版される

新著紹介、新著即報

ことの少なくないのは、學徒に取つて甚だ都合のよいことである。それも新進の専門學者によつて著される爲め、新しい學問熱の其の内に盛られるのは一層喜ばしいことである。本書も亦鑛物及地質の高等學校教課に適する様に編まれたもので甚だ要領よく鑛物と地質との一般を説いてある。翻譯著書が少なくなつて來て、日本人達に適つたものが著されてゆくことは最早遅いことではないのであるが、本書も全々翻譯の域を脱して居る。之と共に處々に記し足らぬ句が往々にあるのは一方から見れば外國書の翻譯でないのを示して居ると同時に一つの缺點である。紹介子の時々云つたことのある原語の綴りと文獻にあげた日本の大家の名に誤字が澤山にあるのは見苦しいことである。又原語が獨逸語と英語と混ぜられてあつて入門書としては甚だ不便である。字體を代へて印刷すべきである。かういふ瑕類が改められたなら本書は地學の習得者にとつて甚だ手頃な參考書となるであらう。(S)

新刊即報

○Geologiska Föreningens i Stockholm Föreläsningar. Bd. 51. Häfte 2. 1929.

On the habit of Giantopteris. (T. G. Halle)

○Zeitschrift für Geomorphologie. Bd. N. Heft 3/4 Juli, 1929.